

# 語法・辞書の研究

八木克正

## はじめに

世間をさわがせた、他人の論文や記事の丸写し(コピペ)は論外である。学問と他人の文章のコピペは両立しない。教育とも両立しない。学生のレポートや卒論までもコピペが横行する時代と聞く。聞く、と言いながら、過去に、私が担当していた学生の卒論にコピペが発覚したことがある(私が見つけたのだが)。やり直させる時間があったのは幸いであった。

だが、言語研究のデータをコーパスから取る場合は、コピペで十分である。というよりも、コピペをして、データとして活用するためにコーパスが存在する。そして、そのコピペは、出典を明記することが条件だが、第三者が検証できる信頼度の高いデータとなる。

問題はその先にある。若い研究者が、コーパスから取りだした大量のデータを前にもがき苦しむのは、避けられない道である。これを通らずに実証的研究での成長はない。今の時代、コーパスを使わない実証的研究は少なくなった。インフォーマントから得た資料だけでは意義のある実証的研究で成果を上げることは難しい。

コーパスが使えても、集まった資料を読みこなせなければどうしようもない。統計処理をする方法もあるが、それはすでに本欄で扱うジャンルとは別の研究である。

コーパスのない時代の実証的研究は、用例収集が勉強の大きな比重を占めた。新聞、雑誌、小説、映画の SCRIPT、さらには各種の辞書などあらゆるものから用例収集をした。収集した用例が必ずしも研究成果としてまとまるわけではない。無駄に積み重ねたカードは今でも私の書齋の一角を占める。

古くて新しい実証研究は、データを読みこなし、いろいろな言語理論の研究成果を利用しながらも自分自身の理論を組み立て、考察を深める。これが実証研究の神髄である。

もちろんデータを手に入れる手段は研究者の自由である。コーパスを使わねばならないという理由はない。後に紹介する単著書は多様である。実証的であるが、必ずしもコーパスとは関係なく、それぞれの言語理論を背景としながら、長期にわたる地道で深い考察の結果が述べられた著書の言葉は傾聴に値する。

なぜ実証的な研究が必要なのか。このような研究なしに文法や辞書の改良はできず、英語教員がぶつかるさまざまな問いにも答えることもできない。変化し続ける英語の分析と記録は、それに信憑性があれば、語法研究論文となり、英文法書や辞書の参考

にされる。そのような意味で、英語教育に密接に関連した研究分野である。

海外の論文だけに目を向けたような実証的研究もあったし、今でもあるが、だんだんと国内の研究成果にも目が向けられてきているように思う。

2013 年度も実証研究の成果を、学会誌掲載論文、論文集、単著書、辞書の順にみてゆくことにする。

## 1. 論 文

### 1.1 『英語語法文法研究 第 20 号』(英語語法文法学会(編), 開拓社, 2013.12)

学会創立 20 周年, 学会誌 20 号の記念号である。20 周年大会での講演が冒頭を飾る。中右実「非人称 *it* 構文——語法と文法の不可分な全体を構文に見る」、大沼雅彦「斜めから見た英語語法文法学会——宛として牛の如きわが半百年の歩みを扱き交せて」がそれである。中右論文は、非人称の *it* の射程の広さを具体的に論じた後世に残るべき好論文である。大沼論文は、英語語法文法学会の歩みから、氏自身の学究の歴史など、幅広い個人的英学史と言える、綿密な資料調査と正確な記憶に基づく回顧である。

続いて、過去の会長の寄稿論文がある。児玉徳美「文と言説」、八木克正「My hobby is collecting stamps. / My job is to cure diseases.——補語の形式を指定する主語名詞」、安井泉「英語の本質を見つめ続ける語法研究」の 3 篇である。児玉(故人、第三代会長)氏は、言語の研究は言説にまで及ぶべきであり、そうすることで、人文社会科学の中核となれると言う。八木(第四代会長)論文は、主語が補語の形式を決定する場合があることを論じ、動名詞、*to* 不定詞、*that* 節、前置詞句の形式を指定する主語名詞の性質を分析している。安井(第五代会長)論文は、文学・言語学に対する造詣の深さを背景に、言語事実と言語理論について論じる。言語理論はなぜ崩壊してゆくの、深い洞察は傾聴に値する。

以下、論文を列挙する。五十嵐啓太「take it that 構文に関わる推論過程とその生起条件」、金澤俊吾「英語における軽動詞構文、同族目的語構文にみられる修飾関係について——*have a/an Adj. drink, drink a/an Adj. drink* を中心に」、関茂樹「否定辞を含む省略節の語順と機能」、土屋知洋「心理形容詞の意味と従える補文標識 *that* の有無との関連性: *surprised* と *satisfied* に焦点を当てて」、西脇幸太「動詞 *eat* の完結性」、濱松純司「前置詞の目的語となる *wh* 節の名詞性について」、明日誠一「会話の含意から「クジラの公式」を読み解く」、吉川裕介・五十嵐海理「*at* 構文の構文的拡張と誇張解釈」。

これらの論文はどれをとっても、それぞれの立場はあるが、理論にたよることなく、先行研究を十分に踏まえて、実証性を重んじ、確実な論拠をもって議論を展開している点で、極めてレベルの高いものばかりである。

この号では語法ノートが2件掲載されている。Akira Nakamura (中村聡), “Composite Noun Phrases and the Choice of *Them* vs. *That*”, 平沢慎也「獲得を表す come by の用法」。

## 1.2 JASEC BULLETIN (日本英語コミュニケーション学会, 第22巻第1号, 2013.12)

本欄に関係のある論文は以下の通り。井上亜依「現代英語に観察される進化する新しい定型表現とその実態——融合形 *in and of itself* と派生形 *in and of* を例として」(この論文は2014年10月の大会で, 学会賞(奨励賞)を受賞), 奥田隆一・箆隆「形容詞とともに使われる *a lot* について」, Harukawa Shuko (春川修子) “Variations of Responses to Negative Yes/No Questions on the CNN *Larry King Live Show*.”

## 2. 論文集

### 2.1 中野弘三・田中智之(編)『言語変化——動機とメカニズム』(開拓社, 2013.4)

は, 「名古屋大学英文学会第50回大会記念事業の一環として文学研究科英語学研究室が刊行した論文集である」(表紙カバーより)。言語変化に焦点を当てた論文集であるが, 英語の具体的問題に取り組んだ論文名を著者名とともにあげる。現代英語がどのようにして今の姿になったのか, そのプロセスを解明する視点は, 語法研究のひとつのあり方として興味を掻き立てられる。

久米祐介「軽動詞構文と同族目的語構文の共時的・通時的関連性について」(上記『英語語法文法研究 第20号』の金澤論文とタイトルは似ているが, 内容は対照的), 宋蔚「最上級の意味を表す *as...as any* の史的発達について」(この論文と, 単著書の3.4『英語定型表現研究』の中の「同等比較表現の再検討——*as...as any (...)/as...as ever lived*」とは, 内容は対照的), 近藤亮一「That 虚辞の消失」, 榎田裕加「There + be 構文と提示の *there* 構文における *There* の歴史的発達」, 杉浦克哉「With 独立構文の通時的発達に関する一考察」, 田中智之「不定詞標識 *to* の(脱)文法化について」, 中川聡「動詞 *try* の補部として現れる原形不定詞節について」, 中川直志「*tough* 構文の構造と派生の歴史的変遷について」, 横越梓「小節の統語構造の歴史的変化に関する一考察——*want* タイプ動詞の選択する小節補部に注目して」, 大村光弘「(I) *hope* の文法化とその動機づけ」, 大室剛志「非言語伝達動詞 *nod* の意味変化とその補部構造」, 中野弘三「*Just* の多義性の由来を探る」。

## 3. 単著書

### 3.1 西川盛雄『英語接辞の魅力——語彙力を高める単語のメカニズム』(開拓社言語・文化選書, 2013.6)

前著の『英語接辞研究』(開拓社, 2006)に続く「接辞の魅力」を実証的に述べたものである。単語の成り立ちを知り, 構成要素をもとに単語の意味を理解することで記

憶しやすいうにすることは英語単語の記憶法としては古典的である。だが本書にもられた内容は、日常的に教室で思いつくまま話すよりはるかに深い。with- が「離れる」の意味をもち、それが withdraw のような単語に反映されている (p. 58f.)。「英語接辞辞典」があればいい (はしがき) が、その作成は著者以外に委ね得る人はないであろう。

### 3.2 千葉修司『英語の仮定法——仮定法現在を中心にして』(開拓社叢書, 2013.10)

英語の仮定法, 特に仮定法現在について, GB 理論を援用しながら論じたもの。欽定訳聖書時代から存在していた仮定法現在がいったん衰退するものの, 現代英語において, まずアメリカ英語で復活し, 徐々に世界の英語にひろまっていることを, 具体的な資料と綿密な文献調査で実証している。仮定法現在は, 現代標準英語に起こりつつある文法的な変化のひとつとしてつとに知られるが, その背景を歴史的に, データと文献で明らかにした本書は, 「仮定法」について学ぶ研究者はもちろん, 一般論としても, 英語学研究のあり方を学ぶための重要文献である。

### 3.3 内田聖二『ことばを読む, 心を読む——認知語用論入門』(開拓社言語・文化選書, 2013.10)

著者は日本を代表する関連性理論の研究者であるが, 平易な言葉で, 認知語用論への案内を述べている。具体的な例は分かりやすく, 説得力がある。言葉を理解するということはどういうことか, コミュニケーションが成立するとはどういうことか, 学ぶ機会がここにある。

### 3.4 八木克正・井上亜依『英語定型表現研究——歴史・方法・実践』(開拓社, 2013.10)

Phraseology に「定型表現研究」という訳語をあてている。phraseology の日本語で書かれた研究書としては最初のものである。「定型表現研究」の言語研究全体の中での位置づけ, 海外と日本の定型表現研究を歴史的に概観から始めて, 著者たちが定型表現研究をどのような方法で研究するのか, また, 「言語経済」を根本的な考え方として (表現方法を定型化することは, 言語を効率的に使用することにほかならない, という考え方) どのような研究が可能なかを述べ, 具体的な定型表現 (you know what / here we go again / let's say / and yet, but yet など / how come? / as... as any (...), as... as ever lived / no matter, regardless など) を, コーパスを駆使してそれぞれの特徴を分析したものである。

### 3.5 久保田正人『英語学点描』(開拓社, 2013.11)

「本書は, 英語をよりよく理解しようと, 折に触れて考えてきたことをまとめたものである」(はしがき)。「第 I 部 英語表現の押さえどころ——英語を教える人のために」には, 興味を引く項目がたくさんある。冒頭の「英語に入ったフランス語再考」は, cow-beef, sheep-mutton のように, 生きた動物としての語がアングロ・サクソン

で、食用になるとフランス語になるのは、「家畜を育てるのは下層民だから英語で表現し、これを食するのはフランス系の王侯・貴族であるからフランス語で表現した」(p. 6) という説に異論を唱えている。他にもとりあげたい例がいくつもがあるが、紙面が許さない。一読されたい。

単著の紹介の最後に、2013 年度の本欄で紹介した、土屋知洋 *A Semantic-Syntactic Study on the Differences between the That-Complement and the Zero That-Complement* (開拓社, 2012.3) が、2014 年の英語コーパス学会大会で学会奨励賞を受賞したことを添える。

## 4. 辞書

### 4.1 *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 4th ed. (*CALD*<sup>4</sup>, 2013)

*CALD* は、*LDOCE*, *OALD*, *MED*, *COBUILD* に並ぶ 5 大学習英々辞典のひとつである。その第 4 版が出た。初版は *Cambridge International Dictionary of English* (*CIDE*, 1995) である。初版は、かなり記述的な辞書であったが、語義ごとに見出しを立てる (*CALD*<sup>4</sup> でも CD-ROM 版はそれに近い) といった独自の編集方針のために、引く辞書としては勝手が違った。現在は他の辞書と見た目は大差はない。第 4 版は編集主幹名が Colin McIntosh となっており、第 3 版の編集陣にはない名前である。新語 (blogosphere, phone hacking), 新タイプの英語 ((インド) crore, foreign-returned) などを加えたことはもちろん、いろいろなメディアから辞書にアクセスできることは、今の時代では特徴と言えるほどのものではない。特筆すべきは、語義に A1, A2, B1, B2, C2 などといった記号が与えてあることである。これは、「ヨーロッパ言語共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages, CEFR) に従った、学習レベルを示したものである。これを Vocabulary Profile と呼んでいる。普段は CD-ROM を使っているのかわからなかったが、紙媒体の本では、英語の writing について詳しい解説 (Focus on Writing) が本体の中ほどにあることを知った。Idiom, Common Mistake, Phrasal Verbs, Other way of Saying... (別の表現法) などのコラムがちりばめられている。

### 4.2 『プログレッシブ中学英和辞典』 / 『プログレッシブ中学和英辞典』 / 『プログレッシブ中学英和・和英辞典』 (いずれも吉田研作 (編), 小学館, 2014.2)

英和・和英とも、前身の『ジュニアプログレッシブ』の「内容を一新して 11 年ぶりに生まれ変わった、最新の中学生向け」(『英和』はじめに) 辞典である。英和の見出し語彙の選択は、上記の CEFR の日本版 CEFR-J に基づいて、「A1, A2 レベルの語彙がカバーできるように」(p. 5) したという。和英の見出し語の選択は、「国立国語研究所の大規模日本語コーパスを使っ」(はじめに) たという。辞書としての成功を期待

## 回顧と展望

したい。

### ま と め

このように振り返ってみると、2013年度も着実に、語法あるいは実証的研究の業績が積み重ねられたことを感じる。新進気鋭の論文はもちろん時代を切り拓いてゆくものであるが、それと対照的に、熟成した思考と手法が詰まった著書・論文が、かえって、これからの研究を主導してゆくという感慨をもった。このような業績が正当に評価され、参考にされることを望む。

(関西学院大学名誉教授)